

乳幼児期及び児童期の子どもをもつ AYA 世代 がんサバイバーにおける内面的・外面的変容プロセス —ピアサポートに焦点を当てて—

中川 大樹 (小峰ゼミナール)

目次

- 第 1 章 問題の所在
- 第 2 章 研究方法
- 第 3 章 分析
- 第 4 章 考察

1 問題の所在

2018 年、がん対策の新たな指針として、第 3 期「がん対策推進基本計画(以下「基本計画」)」が策定された。第 3 期「基本計画」では、従来焦点が当てられていなかった AYA 世代がんの課題と対策の必要性が明記された。その背景にはこの世代が社会制度の網の目から零れている現状、及び結婚・就労など心理社会的成長期における悩みと治療・妊孕性などがんサバイバーとしての悩みが交絡する問題がある。こうした問題に対する支援策の一つとして、ピアサポートがある。がんとの共生が目指される現代では、専門的知識だけでなくピアによる体験的な知識や情報、精神的フォローが求められる。

先行研究では、病気に関する相談や情報交換などの「ピアとの語り」、ピアとの出会いや別れなど「ピアの存在」といったピアサポートによって、がんサバイバーの思考や感情、価値観、行動などの変容が示されている(末貞他 2017)。特に、がん経験を社会活動に生かすプロセスに着目した室田・武居・神田(2013)は、「他のがんサバイバーへ抱き始める関心」から始まり、「ピアサポートによるがんサバイバーからの享受と相互作用の実感」を経て「社会のために活動する役割意識」に向かうプロセスを示した。

しかし、先行研究の多くが全世代的あるいはがん種に着目したものであり、必要性が指摘されていながらも AYA 世代に限定した研究は数が少ない。この世代の悩みや不安の個別具体性を考慮すれば、ピアサポートに出会う理由や契機、ピアサポートでの経験とそれに伴う思考や行動等の変容プロセスに独自の特徴がみられると考えられる。本研究では、がん告知時点で乳幼児期及び児童期の子どもをもち AYA 世代であるがんサバイバーは、ピアの存在やピアとの語りを通じて、どのようなプロセスをたどりがん経験により生じた悩みや不安に向き合うのかを明らかにする。

2 研究方法

子どもをもつがんサバイバーが同じ境遇にある人とつながるためのピアコミュニティサービスを運営する一般社団法人 A 団体の会員である 7 名に半構造化インタビューを行った。分析は、M-GTA を用いた。

3 分析

家族の理解・協力体制の有無、及び相対 5 年生存率に着目し病期の違いから分析を行った。

図 1 に示す通り、がん告知時に AYA 世代かつ乳幼児期及び児童期の子どもをもつがんサバイバーの変容プロセスは、家族の理解・協力体制や病期に因らず同一であった。第 1 段階は、がん告知後に病気や治療などに不安や孤独感を抱き、ピアとのつながりを求めていた。第 2 段階では、ピアと出会い情報交換や胸中を吐露する

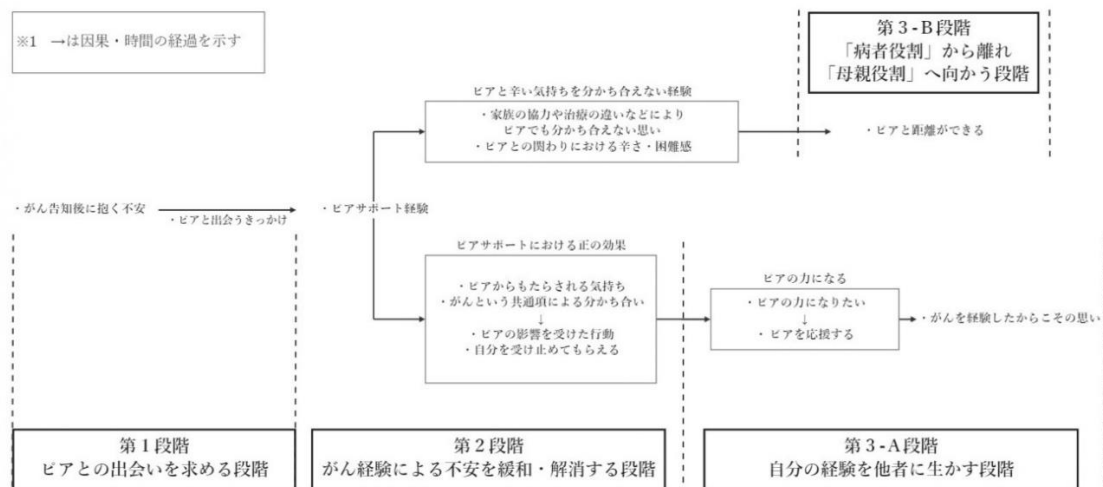


図 1 ピアの存在やピアとの語らいを通じてがん経験により生じた悩みや不安に向き合うプロセス図

中で、辛い気持ちを受け止めてもらったり分かち合っていたりしていた。その後、そうした経験を基に今度はピアの力になりたいと思い、自身のがん経験をピアに話すなどしていた。そして、これらの思考や行動によって、がんになった意味を自身の人生に与え、経験を前向きに捉えていた。これが第 3-A 段階である。他方、家族の理解・協力体制や病期の違いに因らず、それぞれの立場において、婚姻・出産状況や家族の協力、病期の違いなどから、ピアと辛い気持ちを分かち合えない経験もしていた。また、この経験はがん経験年数の長い調査協力者と経験年数の短いピアとでは、がんの捉え方が違うことでも生じていた。これらの経験から、がん以外の共通項が殆どないピアとは距離ができたり、日常生活に割く時間が増え相対的にピアとかかわる時間が減ったりしていた。これは第 3-B 段階であり、第 3-A 段階と同時に生じていた。

4 考察

本研究で明らかとなったプロセスと室田他(2013)が示したプロセスには、類似点が多くあった。しかし、本研究で見られた第 3-B 段階は、先行研究には見られなかった。これは社会復帰するにあたり、治療中割合が低くなっていた「親」や「労働者」としての役割が再度高まると同時に、引き続き「病者役割」を担い、そ

れらの役割を遂行しなければならないという世代性による特徴が社会復帰する段階においても表出したためであると考えられる。

このプロセスに対し、ピアサポートが果たした役割は 2 つある。ひとつは、分かち合い・分かち合えない経験により、がんという窮境における自分らしさの再獲得とピアへ自身の経験を伝え返すという「態度価値」を見出した点である。もうひとつは、ピアサポートに見られるピアとの辛さの分かち合いによる不安や悩みの緩和・解消が、砂賀・二渡(2011)が示したレジリエンス発揮における環境要因としての役割を果たしていた点である。

今後は、男性 AYA 世代がんサバイバーや AYA 世代がんサバイバーの他の特徴に焦点を当て、プロセスを一般化していく必要がある。

主要参考文献

- 末貞晶子他, 2017, 「セルフヘルプ・グループに参加するがん患者の体験」『高知女子大学看護学会誌』43(1).
- 砂賀道子・二渡玉江, 2011, 「がん体験者のレジリエンスの概念分析」『北関東医学』61(2).
- 室田沙織・武居明美・神田清子, 2013, 「がんサバイバーがセルフヘルプグループでの活動を通じて新たな役割を獲得するプロセス」『北関東医学』63(2).